

やる。尼まで乗せて行け。日野、早う支度せいや」
村上は松本親方の従兄の息子で、ブルの運転手ですが、多田には寝泊りせず、西宮の自宅から通勤している若者です。

いつもは仕事が終わると、サッサと帰ってしまりのに、この日は二合ビンが出たのでゆっくりしていたのです。私はその二日前に尼崎へ帳面を合わせに行ったのですが、渡部の帳面が出来ていなかったため、不十分な帳面合わせで帰りました。

そのとき、尼崎の方の現場が忙しいので、勘定は六日か七日になる」と松本親方に言われ、平山親父にもそれを伝えておきました。

私が愚図愚図していたのはその為です。わざわざ尼崎まで行っても、今夜は取下げはないだろうと思っただけです。

そのことをもう一度言っても平山は酒の勢いもあって「何を言うてけつかんねん。そないなこと言うてるから松本親方が横着するんじゃ。五日は五日やないか。え、みんなも首を長くして待っとんや。何が楽しみで働いとんねん」とまくしたてます。

「尼は忙しゅうても、こっちはそんなことないわい。明日は休みや。休みに金がなかったらどないもならん」まさしくその通りですが、やはり気が重いのは、酔っている平山と同行することのわずらわしさです。

しかし、姉御も「一詣に行つたってや」と目配りします。言い出したらきかない親父ですし、酔っているからおさら監視役が必要なのだという意味です。

どっちにしても、先日不十分にしか出来なかった帳面合わせを今夜のうちにしてしまつた方がいいわけです。「それでは」と支度をして、村上の小型ダンプに乗るりとする

と隆夫が出て来ました。「待ってや、俺も行くから」と隆夫のことは前に書きました。松本の兄の死んだ本田親父の息子です。中学を卒業してから進学せずに働いて

いましたが、この頃は重機見習いでした。「何でや、隆夫」平山親父が咎めるように言いました。「用があるんや」「何の用や」

「うんちよっと」

「明日にせよ」

「明日やったらあかんねん」

「どんな用や」

「うん、ちよっと」

「うん、ちよっとじゃ判らんやないか」

「じれったい押し問答が続きました」

「わしと日野は用事で尼へ行くんやで」

「うん」

「小型ダンプは三人しか乗られんのか」

「判ってる」

「判つたら遠慮せよ」

「勝手にせよ」

十六才の少年は強情で、酔った平山は面倒臭くなったのか、根負けしたのか、とうとう同行を承認しました。

隆夫がダンプの後に廻るのを私はとめました。

「隆夫、前に乗れ。コドモはそんなとこに乗るもんじゃなよ」

「いっ恰好したわけです」

隆夫はその言葉を待っていたように、助手席に乗りこみました。

バスや電車とくらべて、乗り替えなしですから、時間はかかりませんが、それでも小一時間、ダンプの荷台に乗っての道中は楽ではありません。

平山親父は発車と同時に寝てしまったようですが、季節のわりにはあたたかかったとはいえ、もう十一月ですから

(たまったものではない)のです。ようやく松本組につくと、どこやらのコンクリが残業で親方は留守でした。

(だから言わないこっちゃない)と言いたいところですが、平山親父は、むしろその方が都合がいいとばかりに、

「西宮へ行ってくる」そのままだ飲みに出してしまいました。残された私は、渡部と帳面を合わせてしまい、あとはあとはテレビでも見ているより仕方がありません。

九時になって、松本親方が帰って帰りましたが、私の顔を見ると「ヤブノへ行ってくる」と言つて、すぐ出かけました。

まだヤブノと完全に手が切れてなくて、工事代金の残

りがあるのを取り下げに行つたのです。

松本親方が帰つて来ると、ほどなく平山親父もいい様
歸でもどつて来て、ようやく用事がすんで、多田へ帰
つたのは、もう夜中と言つてもいい十一時半でしたか
ら、飯場の仲間たちはみんな寝ていました。

用事をすませてと書きましたが、平山はその夜、取
下げの六割しか貰えなかつたのです。

夜もおそかつたし、平山が酔つていたので最終的な精
算が出来なかつたのです。

翌日は定休日ですが、朝早くから起こされました。み
んなが楽しみにしている給料、昨夜渡されるべきそれが
一日延びたのですから、少しでも早く返してやりたいと
いう平山の気持ちです。

仲間たちもふつりなら、昨夜のうちに çık かけてしまつ
ているのに、飯場に一晚寝たのですから、

「遊ぶ時間を損した」

という気持ちの者が多いのです。

もっとも、昨夜、親父と私の帰りを待つていて、給料
を受け取つて出て行つた者も二人いました。

バスもとうりになくなつた夜中に、どこへ行つたのです
しう。

それはともかく、早起きして勘定をすませていると、

平山 親父がいろいろのです。

「日野や、尼へ行こう」

鳥が飛び立つようなせわしなさはです。

(今日は尼崎は休みが一日ずれて仕事に出ている筈、松
本親方も留守の筈)

行つても無駄、イヤ、昼からゆつくり行つた方が……
と思うのは、国士へ出す月報が出来ていないし、同人雜
誌の原稿の切りも追っているし、せめて午前中ぐらい自
分の時間が欲しい、からなのです。

しかし、それを言つても耳をかすような平山親父では
ありません。

第一、昨夜の取下げは、今朝、給料支払いで出て行つ
て、平山の手許にはほとんど一銭も残っていません。

あせるのも無意味なのです。

こう書くと、読者の中には、昨夜の取下げが全体の六
割で、それが給料ならば、残りの四割はまるまる平山の
手元に残るのか。飯場の親方つてもうかるんだな、と思
うかもしれません。

そうではないのです。

その残金から、いろいろ引かれるのです。

飯場で必要なもので、多田では入手出来ないので尼崎
で立替えて貰つた経費などです。

午後の時間を商店街へ出て、いろいろ買物などして、

ゆつくり過しました。

夕方、早目に松本組にもどると、平山もおくられて帰つ
て来ましたが、向たること、べろんべろんに酔つてい
るのです。

間もなく松本親方ももどり、ようやく精算になつたの
ですが、

「今月は(ヤブノ)取下げが少なかつたから、飯場手
当の分は来月廻し」

とツルの一声です。

いつもなら、ここで一もんちやくあるところなのです
が、酔っているせいかな平山は

「うん、そうか」

と、いたつてあっさりしたものです。

用事がすんだら夜の町へ出直してと、心づもりしてい
た私ですが、酔つ払っている平山に金をもたせて、一人
多田へ帰すわけにはゆきません。

タクシーで飯場へもどつて、姐向に精算の報告をすま
すと、すぐ多田大橋のあたりに出ました。

このあたり、運がよければ能勢口方面へのタクシーを
つかまえられます。

私だつて、たまの休みには息抜きをしたいのです。ネ

そして、そのまた残りを持って帰れば、米屋、
油屋、魚屋、八百屋、煙草屋などの掛取りが待つていま
す。

すると、残るのは飯場手当(出勤一人につき百円――
前回参照)だけといつてもいい位になつてしまいます。

土工飯場が、飯代や諸式で儲けているかどうか。これ
はいつも議論のタネになります。

働く者は、これだけ飯代を引いて、こんなものを食わ
せてと思います。飯代までピンハネしやがる――と。

ま、そのことはいずれまたたくわしく書くときもありま
しう。今は、そういう飯場も、そりでない飯場もある
とだけ言つておきましょう。

ともかく、平山にせき立てられて尼崎に着くと、案の
定、親方は現場へ行つて留守。

昨夜といい今朝といい

(だから言わないこつちやない)

のですが、平山はあわてず、

「西宮へ」

出かけてしまいました。

こちらはまったく「いい面の皮」です。とは言え、そ
れも多田を出るときから覚悟したことです。今更あ
わてません。

「チャンのいる店で、一杯やって日頃の苦勞を忘れたいのです。」

とは言え、もう時間もおそいので遠出は無いです。能勢口あたりの赤チーチンが関の山です。

それでもいいのです。イヤ、それが分相応かもしれませんが、このままセンベイ布団にもぐりこむのでは「やり切れなさい」のです。

運よくタクシーをとめ、乗りこもうとすると、背後の暗闇から声がかかりました。

「待てや日野、一諾に乗せて行けや」

平山親父が後を追って来たのです。

「親父さん」

呆れている私を尻目に

「西宮へ行って来る。運ちゃん、発車オーライや」

上機嫌です。

一体、西宮に何があるんだろう。

能勢口で私を降ろした車は、酔った親父を乗せたまま南へ走り去りました。

翌日、親父はもどりません。いや、次の日も、その次の日も、とうとう五日も現場をあけてしまいました。

おかげで私は、その五日間、忙しい思いをさせられました。

した。

そんなことがあったので、次からは給料の取下げに平山が尼崎へ行かなくても、松本親方が多田へ持つてくることになりました。

「それが当り前や、当り前やけど、松本は給料日をより忘れよるからのオ」

と、平山親父は言っていました。

(六)

多田現場の責任者である平山親父が

「西宮へ行く」

と酔っ払って出て行ったまま、五日帰らないのには弱りました。

「だから平山には大事なことをまかされなさい」

松本親方の平山への不満はつのるばかりです。

その親方は毎日一度は多田へ来ることになっていますが、それは建前で、こんな時にも余り顔を出しません。

多田以外にも、あちこちに現場を持っているので無知もないのですが、そうなる私の負担は大きくなります。

(何かあったな)

と思いましたが、見当が付きません。

(今朝ではない。昨夜だ)

昨夜、隆夫がまた彼の車で尼崎へ帰りました。村上と隆夫はあまち仲がよくありません。しかし、今朝の二人の様子に変わったところはなかったのです。

「どこか悪いのか、カゼでもひいたのか」

と聞いてみましたが、そんな理由ではないことは返事を聞く前に判っています。

「まア、いいだろう」

と言ってやると、そそくさと帰って行きました。

その後で隆夫を呼んで

「村上は何で休んだんだ」

と聞きました。

「さア」

というだけです。知らない答はないのに、何かかくしているようです。

村上は、前にも書いたように親方の従兄の子です。

近々結婚することになっていましたから、年令は二十二、三にはなっていたはずですが。

松本の息子の和幸、本田の隆夫、平山の息子の敏夫などとはハトコになるわけですが、年令はずっとはな

止めました。

「今日休むから」

と言います。

その日はブルドーザーの仕事は予定になかったし、あってもブルの運転手の代りが居ないわけではありませんから、村上が休んだからって差しつかえはなかったのですが、どうも様子がおかしいのです。

顔色が変わっているし、声までひきつっているのです。